

第50回 経営協議会 議事要録

日 時 平成26年10月24日（金）13時30分～15時05分

場 所 事務局第二会議室

出席者 宮田亮平 学長、馬場 剛 理事、横里幸一 理事
保科豊巳 美術学部長、澤 和樹 音楽学部長
岡本美津子 大学院映像研究科長

石田義雄 委員、高階秀爾 委員、滝 久雄 委員
遠山敦子 委員、中村胤夫 委員、福井俊彦 委員

陪 席 監事：梅崎 壽 監事、金井 満 監事

渡邊健二 理事、北郷 悟 理事、松下 功 副学長
三田村有純 留学生センター長 [学長特命（国際交流担当及び留学生担当）]
大角欣矢 附属図書館長、関 出 大学美術館長

欠席者 越川倫明 副学長
宮廻正明 社会連携センター長 [学長特命（社会連携担当）]
桐山孝司 学長特別補佐（キャンパス将来構想担当）

○ 審議に先立ち、議長から「スーパーグローバル大学創成支援」の学内説明会を実施した旨の報告があった。

議題

1. 年俸制職員給与規則等について

議長から標記のことについて提案があり、馬場理事から資料に基づき説明の後、審議の結果、原案どおり承認された。

2. 人事院勧告について

議長から標記のことについて提案があり、馬場理事から資料に基づき説明の後、審議の結果、原案どおり承認された。

報告及び連絡事項

1. 平成27年度概算要求について

馬場理事から、資料に基づき報告があった。

2. 平成26年度「スーパーグローバル大学創成支援」選定結果について
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

3. 「東京藝術大学 学長宣言2014」について
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

4. 平成25事業年度財務諸表の承認について
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

5. 学校教育法等の一部改正に伴う学内規則等の点検・見直しについて
馬場理事から、資料に基づき報告があった。

6. 「野澤コレクション」公開事業の協賛の承認について
大角附属図書館長から、別添資料に基づき報告があった。

7. その他（昨今の本学をめぐる諸情勢について）

○ 北郷理事から、机上資料「科研費採択 過去5年の分野別ベスト公表」について報告があった。

○ 北郷理事から、上野「文化の杜」新構想推進会議及びワーキンググループの検討状況等について報告があった。

[学外委員からの主な意見]

○ これまで、国際化、グローバル等言われてきたが、何がグローバル化なのか、違いについて棲み分けが必要となる。グローバル化には資料等に英語版を用いた海外発信が必要となる。

○ 学長にリーダーシップを持たせるには、政策を実施するための予算が必要である。ただし、学長に偏ったものにならぬよう、チェック機能も必要である。

○ 学長宣言の中に、我が国固有の芸術文化、和文化の発信が盛り込まれていることが、グローバル化の時代になると特に必要となる。

○ 藝大の場合は、アニメをひとつの柱としたので、大きく羽ばたくチャンスがある。
・ 岡本大学院映像研究科長から、若者たちが海外に日本文化を発信し、認められた例として、カンヌ映画祭でノミネートされた短編映画「八芳園」の報告があった。
・ 澤音楽学部長からも、国際バッハコンクールのバイオリン部門で、本学の学生が日本人として初めて優勝したとの報告があった。

○ スーパーグローバルをアピールするときは、参考資料のようなペーパーも必要であり、また、多言語化も必要となってくる。

○ オンリーワンのグローバル戦略のポイントについて、一つめは方向性を示すものかと思うが、二番目の「国内外の芸術文化リソース・知見の総結集」については、どう展開していくかが重要で、次の「オール藝大」については、OBの力も必要と考える。

○ これは金を集めることが目的ではなく、藝大はその人達のアビリティを結集できる力を持っているので、その資源を活用し、現役の人達とコラボして上野の杜の核となってもらいたい。オンリーワンの藝大だけでなく、OBや地域を巻き込んで、例えば、上野の杜フェスティバルなどを開催して、上野の杜の潜在的力を示してもらえれば、日本の伝統文化も活気づくし、最先端の文化も同様である。等々といったような構想を戦略の一端に設けてもらえればと考える。

・ 議長から、OBに関する発言があったが、藝大を卒業しても40代までは、皆藝大生との思いがあり、大きな戦力と考えている。また、卒業生に限らず、退任された先生方にも活躍できるような環境作りをしていきたい旨の発言があった。

○ グローバル展開とは、藝大がオープンなプラットフォームとして再出発するものと考えるので、全てのシステムがオープンでなければならない。従って、国内に向けても藝大は排他的であってはならない。日本全体が、日本の文化の源泉を担って発展してきたのだから、他大学のことは関知しないではなく、国内に向けてもオープンにし、何かと一緒にやるための条件付けなどせず、藝大の魅力に引きつけられて、藝大のプラットフォームと一緒にやっていきたいと、他大学にも思われるようなアクセスポイントになることが大切である。

○ それとの関連で、歴史的な背景は非常に重要で、上野の杜に関しても、全体をグローバル化していくことも、地域のリソースとか、文化資源などを揃えることが必要だが、それらには歴史的な記憶の資源も入ると考える。歴史的な記憶を顕在化させ、しかも批評されることは、アーカイブ構想などがそうで、どういう形で過去のをシステムティックに保存し、伝え、そして人々に歴史を伝えていく。作品が歴史を背負った意味は非常に大きい。藝大はその点で、いろいろやってきたことが注目されていて、それは十分生かしてもらいたい。

○ 特にグローバル化の問題で、世界に向かって発信していくことも大事だが、藝大がアジアの一員として、東アジアの中でどういう地位にあって、日本の特性がどう出ているか見極めることと、扱いにくいことだが、台湾や韓国などの関係においては歴史も重要な問題なので、様々な事情はあるが、明治期には、中国、韓国などから留学生が藝大に來ただけでなく交流もあったことから、それを歴史的な過去の重要な記憶の遺産として、保存、公開するというシステムを考え、学術研究としてシンポジウムなどを行い、その中から将来どうアジアとの関係を持つか、それが世界に対しても広い意味を持ち、美術の評価に関しても新しい基準が生まれてくる。その中で、藝大が中心となり、昨年はアジアから注目が持たれたと考える。すこしそういった大きな視野で制作に関しても進めてもらいたい。

○ 2020年のオリンピック・パラリンピックが決まった後、日本、東京のレガシーは藝大が中心になりそうに思う。1000万人を3000万人にするという具体的な方向性がある。

○ グローバル・スタンダードという言葉に対して、何をもちてこれをグローバル・スタンダードと言うのか、その言葉を英語等でどう表現するのか、かなり難しいと考える。海外から見て理解できる文書にどのようにするか、我々自身が考えているグローバルという言葉がどういうことを意味するか、もう一度見直すためにも、そういった視点からの再評価といったことが必要と考えるので、議論していただきたいと感じる。

○ グローバル・スタンダードとは、非常に偏った感じがする。基本的に西洋的な価値観が自分たちと同じだと思っている人が多い。グローバル言語でやるということは、英語でということになってしまうが、それは違う。数が多いということではあるが、少数言語も重要である。その辺のことはグローバル化の時代において問題となってくると思うので考えもらいたい。

○ 年俸制は、法律を通してからもなかなか進まなかったが、約10年経って各大学で受け入れられるようになってきた。今後も是非進めてもらいたい。

○ 年俸制の導入は、必然的なことでもであり、タイミングとしても符合したものと考える。

○ 年俸制の導入にあたっては、どういう人に適用され、どういう人に従来型の給与体系が適用されるかの区別が大切で、年俸制の適用者は特別な人で、普通の人は年俸制の適用を受けないといった感じで進むと、従来の給与体系の者は閉鎖的になる。従来型の給与体系から始まった者も、ある飛躍を経た後は、年俸制に移行できるというプロセスが必要で、つまり従来の給与体系にはステップバイステップで飛躍がない。年俸制には飛躍があるが、逆に言えば下落もある。藝大の年俸制に、減俸があるか聞いてはいるが、次の年俸交渉をする時は、評価の結果如何によっては、下げるということも盛り込まれていなければならない。従来の体型は、よほどのことがない限り下落がなく、ステップバイステップのため、横のことを気にしないので、より閉鎖的社会になる。年俸制は差別なきものでなければならず、誰でもある飛躍を遂げれば、こちらに移行できることが大切である。

○ もうひとつは、評価システムが重要となる。民間会社であれば、収益基準というものがあるが、大学や研究所ではそれがなく、何を基準に評価するのか、評価する方も、される方も、その尺度は事前に明確に認識していなければならない。つまり次の新しい価値に対する挑戦という点では双方同じで、どういう価値に向かってチャレンジするのか、この人の研究計画やあるいは挑戦するプロジェクトが何か、それを評価する側である大学は、初めからそれらを良として考えなければならないし、評価される側である自身もこのプロジェクトは大学が認知したものだから達成するというものでないと、ある期間経過したとき、自分としては達成したとしても、大学が初めから認識していなければ、まったく別の基準で評価することになり、この制度は死に体になってしまう。

○ 従って、収益基準なきシステムにおける年俸制は非常に難しい。最初に和議を共有していなければならないし、それは大学もチャレンジするし、当該本人もチャレンジする。結果として、評価するときは、まず自己評価させなければいけない。こういう約束をして、ここまでやりましたと、それに対して、大学の協力が不十分だからかもしれないが、芽立ちですねとハッキリ言えなければいけないし、あるいは過剰達成であれば、そのこともハッキリ認めなければいけない。そういうダイナミックな組み立て方があれば、生きてくる。海外から特殊な先生を呼ぶときだけ年俸制ということだとあまり発展性がない。

- ・今の藝大の年俸制の制度設計は、ほぼそういう形になっていて、10月1日から行っている。年俸制は、現在いる教員に関してはなくとも良いが、新規採用者については、年俸制を基本とし、その際に基本部分と積み上げの業績部分に分けて、業績部分はきちんと業績評価をして、決めることになっているので、当然それがない場合もある。積み上げていって、がんばれば増えていくが、がんばらなければ下がってしまう。そういう意味では上下することがある。企業が行っている業績給とは、若干ニュアンスは違うが、それに近いシステムになっている旨の発言があった。

○ 評価者と評価される者と、新しい概念に向かっての到達経路の途上における備蓄である。自己評価と客観評価で決着がつかない場合がある。その場合は、学長判断になる。年俸制度はそのように厳しいものだと考えている。客観評価の材料はいろいろあるが、自己評価はなかなか難しい。

- ・議長から、藝大をアピールするとき、評価基準を持っていなかったのも、そこをきちんとしていきたい旨の発言があった。

○ 芸術の場合は様々で、その評価基準をどう定めるか問題で、そのシステムはオープンにしておかなければならない。特に未来に向かって新しい芸術を行おうとするときは、歴史的に見ても評価が分かれることが度々あったので、評価システムを決めておく必要がある。

○ もうひとつは芸術の場合、年単位では動かない。成果は、10年後、20年後に発揮されてくる。特に教育問題の場合、かなり長期のスタンスが必要で、それをどうしていくか問題である。最終的には学長を中心として評価していくと考えるが、同時に歴史に対する責任だと考える。できる限りそれを納得させるようなシステムが必要である。

○ 藝大が世界中から呼びたい先生方には年俸制が必要で、清華大学がすでに世界中から人を集めているが、文化芸術に関しては、藝大が着々と実行しているような感じがし、期待している。

○ 藝大では、卒業してからの就職に多少のリスクがあると感じたが、国家予算の1%を文化予算に当てるという法案を実現し、藝大の人に仕事の間を作るということを考えている。

- ・議長から、昨日、他大学の学長からタッグを組まないかとの話があり、これ以前からも多言語化の話はあるので、進めていきたいと考える。また、国内のオープンプラットフォームについては、〇〇県知事からオファーがあり、日本の文化芸術、日本の歴史、経済や政治も含めた起点であるとすれば、そこ海外との連携を作るときに、藝大は、年間を通して20人から30人の者がずっと行っているのも、これを活用するよう伝えた旨の発言があった。

- ・美術学部長から、机上資料「日本・台湾現代美術の現在と未来」について報告があった。

- ・大学美術館長から、「台湾の近代美術展」について報告があった。

- ・留学生センター長から、藝大の卒業生などが海外で行ってきた、これまで封印されてきた芸術文化活動の歴史的な顕彰の発表等の実施と、留学生間のネットワーク作りについて報告があった。

- ・外部委員から、8月に行われた行われた「三越×藝大 夏の芸術祭2014」について、報告があった。

- ・大学院映像研究科長から、藝大アーツサミット2015で、日中韓の学生が最後に仕上げの時に歌ったものがアニメソングであったように、アニメは海外から熱い注目を集めていおり、入学希望者、研究者からのオファーもかなりある。映像研究科もスーパーグローバルや機能強化でチャンスをもらったので、強化していきたいと決意しているところではあるが、横浜のキャパシティの問題などから答えられていない。産学官が共同で国策としてアニメを推進する機関ができないものか、お知恵やお力をお借りしたい旨の発言があった。また、藝大は日本のアニメ界に人材を輩出しており、日本のアニメのオリジナルは藝大であると言っても過言ではない旨の発言があった。

- ・留学生センター長から、日中韓の学生達は、日本のアニメソングを歌うことができる。それは日本の力であり、日本として大事にしなければならない文化だと思ふ旨の発言があった。

○ 外部委員から、アニメによる発信だけでなく「八芳園」を観たが、向こうの考えていること、グローバルスタンダードを揺さぶった。良いのか悪いの自分たちの考えでは分からない。本来であれば分からないものはだめなグローバルスタンダードであるが、しかし何かあるということは、芸術の力である。それは大事なことである。

○ 今、各大学が多少競っている部分と、現実とどう向き合っていくか、大変な要素があるが、深度化するためには、社会の第一線で活躍する外部の人間や、次代を担う准教授、講師など年の離れた者との議論を、どう展開していくか、活性化のために大切である。